KITO:

DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

神戸スタディーズ

時間と空間を横断しながら、足元を見つめる

KOBE

時間と空間を横断しながら、
足元を見つめる
神戸スタディーズ
KOBE STUDIES

神戸ってどんなまち？

と聞かれたら、
あなたはなんと答えるだろうか。

「神戸スタディーズ」とは

さまざまに語られる神戸というまちのイメージをあらためて考えるため、
多様な専門分野の方を講師に迎え、神戸の足元を見直す試みである。
2013年2月より2014年1月まで、3人の講師を招き、レクチャーおよびフィールドワークを開催した。
本冊子はその内容を元にし、フィールドワークにて取り扱ったスポットを紹介するとともに、
講師による図説・論説を収録する。ぜひ本冊子を片手に神戸のまちを歩いてみてほしい。
複数の時間、空間をまたぐ視点で、新たな神戸の姿に出会えることだろう。

人はすべて、場所の精霊に尋ねるべし。～「神戸スタディーズ」を巡って

芹沢 高志

デザインの現場にいると、しばしば「神戸オリジナルのデザイン」ということが強調される。もちろんそのことに異論はないが、「神戸オリジナルのデザイン」とは、たまたま神戸で思いついたデザイン、ということではないはずだ。つまり神戸でなにかが生まれてくる必然を、われわれはどのようにとらえたら良いのだろうか？いやそもそも、われわれは自らの脚で立つこの神戸という土地について、どれだけの理解をしているのだろうか？そんな疑問が、**「神戸スタディーズ」**を計画する根底にあった。デザイン分野においては、普段あまり意識されない足元の土地を、**地理、歴史、都市史、社会学**など、幅広い領域を横断しつつ再発見したいという試みだった。

初回は編集者であり地図デザイナーである**深澤晃平**氏をお呼びして、**「神戸レイヤーマッピング」**と題する講義とまち歩きを行った。彼のつくる地図は都市化された空間に地形や先史時代の遺跡、古道、寺社仏閣、特徴的な土地利用などをレイヤー化して重ね合わせるもので、中沢新一氏の『アースダイバー』などにも使われている。その手法で神戸のレイヤーマップをつくり、その地図を持って実際のまちを歩く。大規模な流路変更や暗渠化で、今はほとんど見えなくなってしまったが、生田川跡や湊川跡など、昔の川の痕跡を求めて土地を歩く経験は極めて刺激的で、まちの見え方が劇的に変わってしまった。

こうやって基本的な神戸の時間−空間構造を身体的に実感した上で、次に都市史、建築史研究者の**松田法子**氏をお呼びして、**「地−質からみる神戸」**という講義、まち歩きを行った。3回にわたる講義は今回の「神戸スタディーズ」シリーズの細論といったところで、大地、海、水際、それぞれの観点から神戸の土地利用史を鮮やかに浮かび上がらせてくれた。ここで彼女のいう「地−質」とは一般的な地質の意味を含みながらも、その場所や土地のキャラクター、ないしはクオリティに目を向けた概念で、人間と環境の相互作用の総体を表す上で有効な視点に思えた。

具体的なフィールドとしては旧居留地、元町、三宮に代表される「神戸」、そしてこれに隣接し、より古い歴史を持つ港町「兵庫」を選び、その特徴、つまり「地−質」を焙り出す。そしてその上で、兵庫津周辺を実際に歩いたのだが、彼女はフィールドサーベイに長けた研究者だ。なかなか気づきにくい土地のサインを次々に示してくれて、なにか自分が探偵小説のなかを生きているような気分になっていく。

そして最後に、「水の民」の視点からユニークな地域研究を展開する都市社会学者、**山田創平**氏をお呼びして、**「垂直の空間性からみる神戸」**という講義をしてもらった。深澤、松田両氏とともに山、川、水際と、土地に密着して神戸を見てきたわけだが、ここで一気に視点は上昇し、太古から続く水の人々、海の人々の営みといった、より大きな枠組みから、俯瞰的に神戸を見る。示唆に富む刺激的な講義だったが、とりわけ加古川と由良川を通して日本海の若狭湾と瀬戸内海の播磨灘が結びついているという指摘には驚愕する。海の人々のネットワークについては私も関心を持ってきたが、港と港をつなぐ海上ルートのことばかりを考えてきたからだ。この日本列島の上に網の目のように張り巡らされた太古からのネットワークに想いを馳せ、神戸という土地が急に遠方と結びついて新鮮な驚きになったのである。

各氏の刺激的な講義に触れるたび、私のなかでは**「ゲニウス・ロキ」**という言葉が、ますます実感を持って立ち上がっていった。なんとも訳しにくい言葉だが、その場所特有の雰囲気とでも言えば良いだろう。イギリスの詩人、アレクサンダー・ポープは、バーリントン卿リチャード・ボイルに宛てた書簡のなかで、**「人はすべて、場所の精霊に尋ねるべし」**と、場所の精霊(the genius of the place)について触れていたが、これこそラテン語のゲニウス・ロキのことだ。lociとはlocos、場所のことであり、geniusとはspirit、精神とか魂とか精霊と考えれば良い。元はローマ神話に現れる場所を守護する精霊で、ヘビの姿で描かれることも多かったらしい。ただ、一定の姿かたちを持つものではなく、その場に漂う精気のようなものとされている。

日本語でも、風土とはある土地の地勢や気候、土地柄ではあるが、**そこに生きる人間の精神や思想もまた、土地との相互作用で形成されていく**という意味で、文化的環境そのものを指してもいる。また中国では古くから風水、つまり土地そのものに神秘的な力を認め、その力が人間に及ぼす吉凶禍福を説く考えもある。いや、それだけではない。風水はその知見をある種のデザイン原理として、実際の人工物のデザインに反映させようともする。こうした伝統を非科学的と断じるのは簡単だが、場所の特性がわれわれになんの影響も与えないと考えるのも、同じように非科学的と言わざるを得ない。

最近、アーティスト磯辺行久氏の業績に関わるあるシンポジウムでモデレーターを務めたが、その席で磯辺氏は**データベースの充実**こそが重要であると強調していた。彼は我が国の現代美術界でも特異な地位を占める重要な作家だが、同時にイアン・マックハーグが始めた「エコロジカル・プランニング」という地域計画手法の紹介者、実践者としても知られている。彼は、世界認識のベースとなる、土地の基本データの集積こそがまずもって重要であり、そのデータを**読みとり、読み替え、隠された関係性**を表現するのがアーティストやデザイナーの務めであると考えるのだろう。

場所を巡る思索はきわめて重要なことと、今回あらためて確信した。結局われわれは、なにかに困った時、土地の精霊に尋ねるべきなのだが、その**尋ね方、あるいは精霊の声に対する耳の傾け方**に疎くなってしまっている。その方法を捜そうとするひとつの試みが、この「神戸スタディーズ」ではなかったのかと思っている。

INDEX

1 「神戸の見えない座標軸」 深澤 晃平 09
図 説 神戸の見えない座標軸 12
SPOT 01 天井川の跡を走る三宮のメインストリート（フラワーロード） 16
SPOT 02 立体交差する町と公園（新開地商店街、湊川公園） 18
SPOT 03 旧湊川を辿る旅（東山商店街とその周辺） 20

2 「地-質からみる神戸」 松田 法子 23
SPOT 01 水に囲まれた小さな町（船大工町） 26
SPOT 02 川が作った舌状の土地（西出町、東出町） 28
SPOT 03 失われた入江（佐比江、七宮神社） 30
論 説 地-質からみる神戸 32

3 「兵庫県沿岸地域の空間性」 山田 創平 43
SPOT 01 山越えのない水分れ街道（氷上回廊） 46
SPOT 02 古代淡路島の空間性（淡路島） 48
SPOT 03 海と海の神々に抱かれた町（七宮神社） 50
論 説 兵庫県沿岸地域の空間性〜大阪湾と播磨灘の水の文化を中心に〜 52

開催概要
筆者紹介 58

1

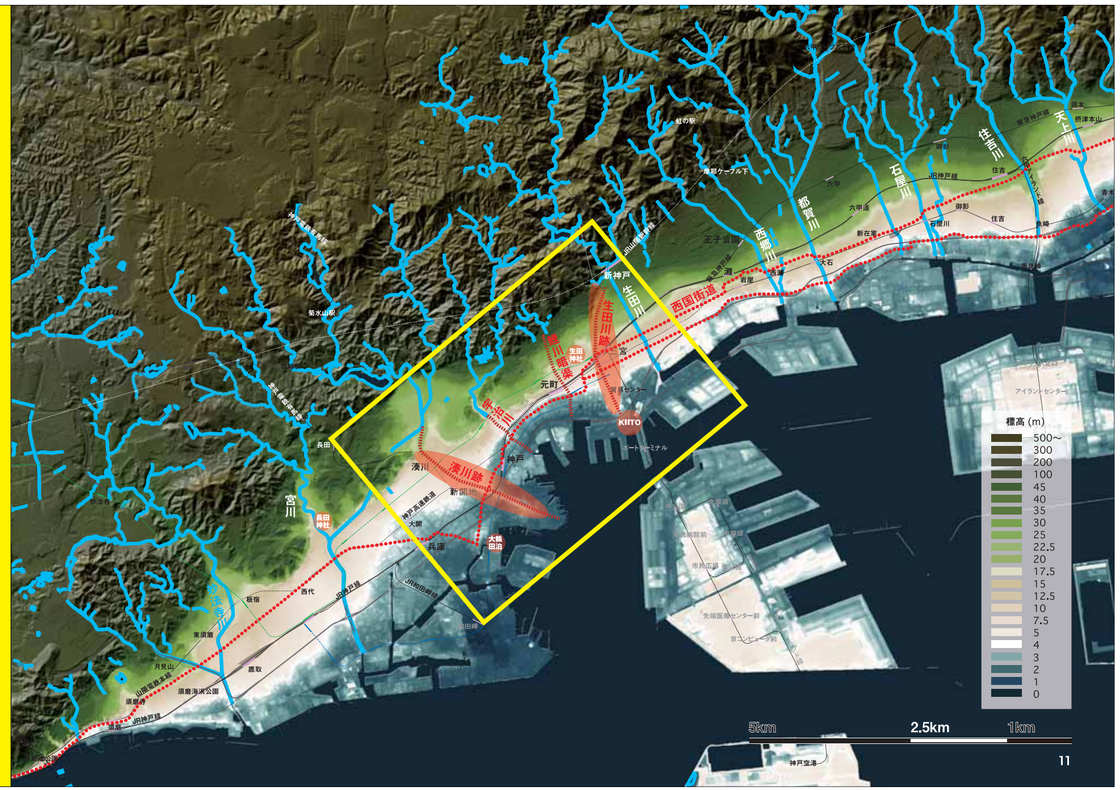
神戸の見えない座標軸

深澤　晃平
Kohei Fukazawa

主要対象エリア　神戸市内：市街地

「神戸レイヤーマッピング」
（国土地理院、国土交通省・水管理・国土保全局 作成の「基盤地図情報（5mメッシュ標高）」を、「カシミール3D」により加工し作成／2013年）

「神戸フィールドワーク#1　神戸レイヤーマッピング」（2013年2月23日）の際に作成。
地形や河川などの自然環境をベースに、道路・交通機関などのインフラ、
神社仏閣・史跡や、歴史的変遷を示す古地図などの様々な層（レイヤー）を重ね合わせた。



神戸の見えない座標軸

深澤 晃平

明治以降に都市としての発展を遂げてきた神戸では、それ以前の歴史の痕跡を海岸低地に広がる中心市街に見出すことは難しいようにみえる。近代の幕開けとともに開かれた港、それにともなってつくられた居留地を中心に近代都市・神戸の都市空間が形成されてきたことは事実だが、それはまったくフラットな場所に自由につくられたわけではなかった。ここでは、普段見慣れた地図に地形の視点を重ね、低地に広がる微細な地形の起伏に着目しながら、近代以前から連続する空間構造を描いてみたい。

芦屋から須磨に至るまでの細長い海岸平野には至るところ、六甲山地を源とする急流河川が大阪湾へと注いでいる。山から海までをあっという間に駆け抜ける水の流れは、日本酒や天然水のようにこの地域の名産をもたらしてきた。ところが、神戸の心臓部と言える三宮から兵庫にかけては、河川の姿は見られない。これは、生田川と湊川を、中心市街を迂回させるため近代になって付け替えたためである。元の流路は、生田川は現在のフラワーロード、湊川は現在の東山商店街から新開地商店街を通って、大阪湾へと注いでいた（図1）。

図1「維新前神戸之図」（所蔵：生田神社）
江戸時代末の神戸、港や居留地が建設される以前の神戸の様子がよくわかる。生田川と湊川の旧流路のほか現在の中心市街には幾つもの川筋が刻まれていた。生田川、湊川とも流域は開発が行われておらず、後の居留地となる場所は村はずれに位置していたことがわかる。

大規模な土木工事を経て現在の流路へ変更が行われたのは、生田川は1871（明治4）年、湊川は1901（明治34）年。旧生田川の場合はその河口にできた外国人居留地を氾濫から守るため、旧湊川の場合は神戸駅付近で1.5mの浸水となり死者38名を出した1896（明治29）年の水害をきっかけとしたものだった。今ではそのようなイメージは薄いが、神戸は長い間水害に悩まされ続けた土地で、明治期だけでも5回の大きな水害が記録されている（図2）。

図2 1896年、湊川流域の水害の様子。（所蔵：神戸市立博物館）

図3 1938年、阪神大水害時の三宮駅前の様子。（提供：毎日新聞社）

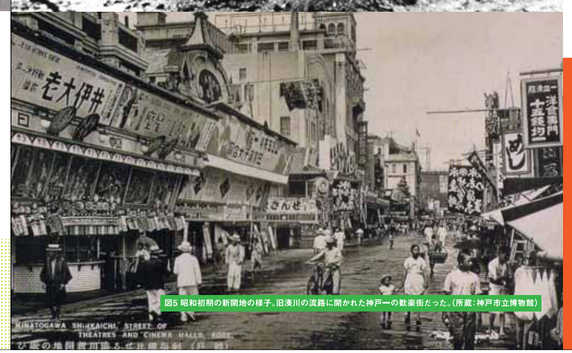


図5 昭和初期の新開地の様子。旧湊川の流路に開かれた神戸一の歓楽街だった。（所蔵：神戸市立博物館）

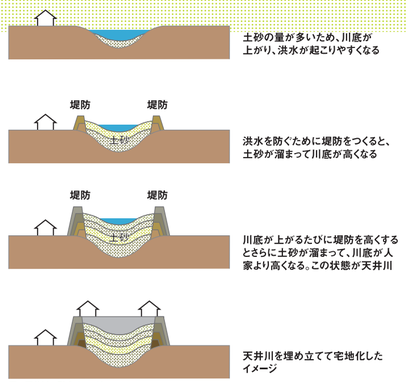


図4 天井川の形成イメージ

極めつけというべきは死者が616名にものぼった1938（昭和13）年の阪神大水害で、六甲の急斜面から流れ出た水はその下流でたびたび氾濫を起こしてきたのである（図3）。

旧生田川も旧湊川も、川底が周囲の土地よりも高い「天井川」だった。通常、川は大地を刻んで流れるから川底は周辺の土地より低くなるが、山地から勢いよく運ばれてきた土砂が堆積してその川底が周りの家の天井より高くなってしまったのが天井川である（図4）。

現在もフラワーロードや新開地商店街を注意して歩くと、旧流路が周囲より高くなっているが、これは天井川の痕跡なのだ（図5）。どちらの川も明治になるまで橋は架けられておらず、生田川より西が八部郡、東が葺原郡とされ、明治に入ると生田川から湊川までが神戸、湊川以西が兵庫と区分されたように、境界としての性格も併せ持っていた。

図6「須磨浦山案内磨寺眺望」（所蔵：神戸市立博物館）　江戸末期の神戸湾と兵庫湾を描いた鳥瞰絵図。左が兵庫湾、右が後の神戸湾。3つの岬のうち2つに天井川（旧生田川、旧湊川）が流れる。まちの規模も神戸より兵庫のほうが大きかったことがわかる。

現在は見えなくなっているが、この2つの川の間にも大小いくつもの川筋が刻まれていた。メリケンロードから鯉川筋には、その名の通り鯉川と呼ばれる小川が流れていたし、「メルカロード宇治川商店街」の下には現在も、暗渠化されたかつての宇治川が流れている。

1871年につくられた居留地は、旧生田川と鯉川の2つの河川に東西を挟まれ、南に海をのぞむ場所に誕生した。西洋文明を象徴する洋館が建ち並ぶモダン都市の立地は、その内部の整然とした人工的な街区とは異なり、こうした自然地形によって縁取られているのである。

そもそも神戸の中心市街地が広がる海岸低地は、先に述べた急流河川が運んできた土砂によって形成されたもので、旧生田川と旧湊川の河口が岬状の地形をなしているのもこのためだろう。これに和田岬を加えると、3つの岬に抱きかかえられた2つの扇型の湾という神戸の原型が見えてくる。現在は埋め立てによって見えにくくなってしまったが、2つの扇型の半円が交差する市章の由来はここにある。さまざまなものを迎え入れ、また送り出す際に古代から用いられてきた扇が港のメタファーとされたことも、大変興味深い。

より古い来歴を持つ“扇”は、「大輪田泊（おおわだのとまり）」や「兵庫津（ひょうごのつ）」として知られた兵庫港である。これは瀬戸内海と大阪湾の接点にあって、和田岬に守られて西からの潮の影響を受けずにすむ天然の良港で、古代から京・大阪と日本各地を結ぶ中継港として発展を遂げてきた。そして明治に入るともう一方の“扇”、神戸港が開発されていく（図6）（図7）。

図7 明治期の海岸線をもとに見る3つの岬と2つの湾
（「神戸都市計画海路運輸道路設備工事計画往来出張金額事後記録」に所収の計画図を加工。所蔵：神戸市立中央図書館）

この港からさまざまな他者を受け入れることで、そこに誕生した都市は新たな文化を生み出していくことになる。その都市空間の南北の軸線となったのが、旧生田川（現・フラワーロード）であり、旧湊川（現在の東山から新開地にかけての商店街はこの流路跡に築かれた）と言えるだろう。一方、東西の軸線には言うまでもなく、古代から京・大阪と西国・九州方面を結んだ動脈であり、近世には参勤交代行列が通った西国街道が挙げられる。そのバリエーションとして、国道2号や鉄道の路線がそれぞれ海岸低地に等高線を描くようにつくられていく。

神戸の都市空間の変遷は、この南北軸と東西軸の交点の移動として捉えることができる。旧湊川と西国街道の西の交点が神戸駅周辺であり、旧生田川と西国街道の東の交点が三宮駅周辺で、西国街道は「元町通り」へと変貌し発展を遂げていく。

1868年の開港以後、近代都市の発展の中心となったのは神戸駅のあたりだった。関東における横浜駅の開業から2年後の1874（明治7）年、

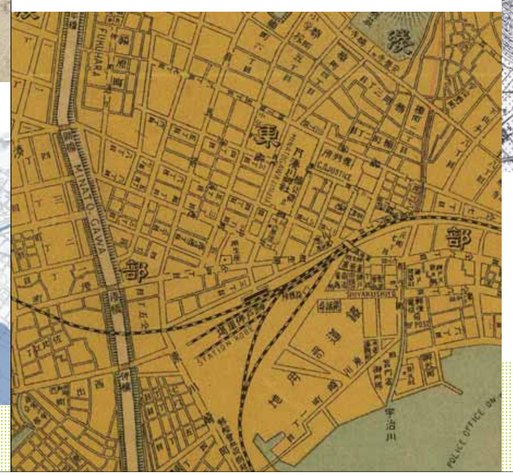


図9
明治中期の兵庫から神戸にかけての地図。
市街地は兵庫から神戸にかけて広がり、三宮周辺はまだ開散としていたことが伺える。
（「二万分の一地形図」大日本帝国参謀本部陸軍部測量局作成「神戸」「兵庫」「須磨村」を加工して作成）

日本で2番目に敷かれた鉄道路線の終着駅として誕生した神戸駅は、旧湊川の東のほとり（兵庫津と居留地の間でもある）につくられたのである。駅舎は立派な煉瓦造りで、周囲には中央郵便局や神戸新聞社、地方裁判所といった業務機能が集積していった。市役所も神戸駅のすぐ東隣につくられた（1909［明治42］年に橋通の地方裁判所の隣に移転、三宮の現在地に移転するのは1957［昭和32］年）（図8）。こうした業務機能の集積にともなって、旧湊川のかつての川面の上に開かれた“新開地”は「西の浅草」と呼ばれる歓楽街を形成していったのである。

三宮駅は当初、現在の元町駅の場所につくられた居留地に暮らす外国人のために設けられた簡易な駅に過ぎず、旧生田川土手の現在地に移転したのは1931（昭和6）年のことである。1912（大正元）年に阪神電車、1936（昭和11）年には阪急電車の終着駅がつくられたが、現在の賑わいにつながる発展を見せるのは、戦後10年余り経って市役所が現在地に移転してからのことである（図9）。

海岸沿いの低地は、六甲山地の急勾配と比べると圧倒的にフラットだから、一見すると海に向かってなだらかに傾斜しているだけのように見えるが、その大地には微妙な起伏が刻まれている。その起伏をつくってきた川は、川としての姿を失いながらも、見えない座標軸として都市空間の形成に大きな影響を与えているのである。

図8「神戸市新図」（所蔵：国際日本文化研究センター）
・湊川の付け替えが行われる以前の神戸駅周辺の様子。駅の東側に市役所、警察、
・郵五所、新聞社などが集中し、商業は旧生田川から多聞通、中町通が繁華街となっていた。

01 フラワーロード

（神戸市中央区加納町1丁目～加納町6丁目）

天井川の跡を走る 三宮のメインストリート

1868（明治元）年にその河口とも言える場所に外国人居留地が設けられたのに伴い、3年後の71年に現在の流路へと付け替えが行われた旧生田川。当時、その流路跡は布引（ぬのびき）の滝に通じていることから「滝道」と呼ばれたという。現在はフラワーロード（直訳すれば「花道」だ）と呼ばれるかつての流路を歩くと、この川がかつて氾濫を繰り返した天井川だったことを示す痕跡が数多く残っている。

たとえば、三ノ宮駅北側の雑居ビル1階の街路に面した部分には、北を向いたお地蔵さんが祀られている。これはかつて洪水からまちを守ったお地蔵さんであると言われ、ビルの名称はその名も「地蔵ビル」（図1）。また、フラワーロードの西側の「加納町（かのうちょう）」という町名は、東遊園地から新神戸駅まで南北2km余りに渡っており、異様に細長い。これは旧流路の宅地造成を行った明治の実業家・加納宗七に由来する（図2）。実際に天井川の地形差を体感しやすいのは、三ノ宮駅の南、神戸市役所1号館で、建物南東の交差点から旧居留地方面へ向かうと建物1階分の急激な坂を下ることになる（図3）（図4）。

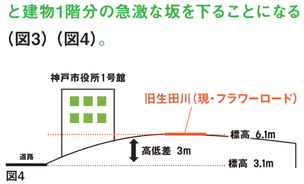


図4

図1：ビルの外壁に埋め込まれるように鎮座している「北向き地蔵」

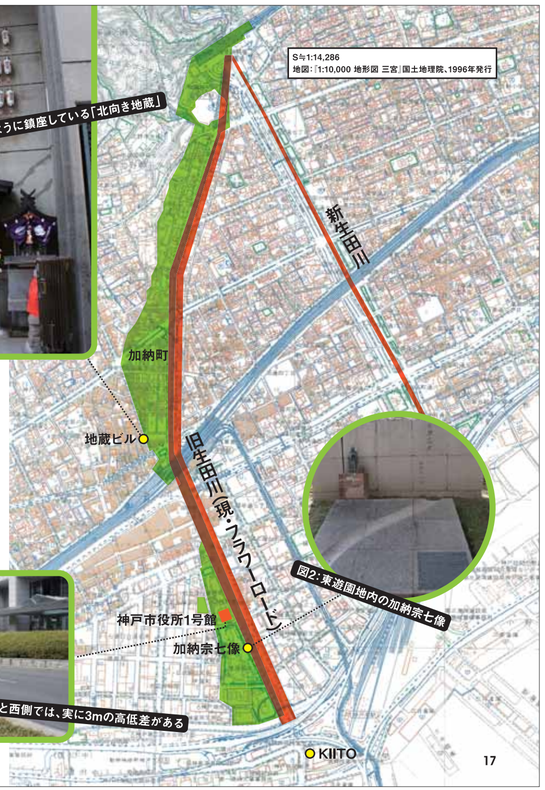


図2：東遊園地内の加納宗七像

図3：神戸市役所1号館の東側と西側では、実に3mの高低差がある

02 新開地商店街

（兵庫県神戸市兵庫区新開地1丁目〜6丁目）

湊川公園

（兵庫県神戸市兵庫区荒田町1丁目〜新開地1丁目）

立体交差する町と公園

旧湊川の流路は、度重なる水害と神戸港への土砂の流出を避けるため、1901（明治34）年に現在の流路へと付け替えられた。現在新開地商店街となっているのがかつての天井川の流路で、土手沿いに新たに開かれた街「新開地」は、映画館などの娯楽施設が建ち並ぶ「西の浅草」と称される繁華街だった。6m（建物2階分くらいの高さだ）に及んだという土手の高低差は健在で、商店街から脇道に入ると急な下り坂となっており、現在の商店街と店舗はかつての土手上に並んでいることがわかる（図1）。福原遊郭が旧湊川の東隣にできたのは、付け替えが行われるより以前の1871（明治4）年。いつ水害に見舞われてもおかしくない土手下の低地につくられたのである。

湊川公園も旧流路の上につくられた公園。ただしここは1960年代後半の都市整備によって土手が撤去され、現在は人工地盤の上に立っている。人工地盤の下、かつての土手中腹には映画館やスナックなどが並ぶ昭和レトロな「ミナエン商店街」が貫通しており、立体的な迷路のような空間構成がおもしろい（図2）。

図2：公園の真下に位置するミナエン商店街

03 東山商店街とその周辺

（兵庫県神戸市兵庫区東山町1丁目～湊山町）

旧湊川を辿る旅

「神戸の台所」として親しまれる東山商店街は、戦後の闇市を発祥として、旧湊川の流路にできた商店街だ。商店街の南側の入り口に立つと、道の向こう側の湊川中学校（昭和20年から昭和32年まで神戸市役所があった場所）を眼下にのぞむことになり、土手の上に商店街が位置していることがよくわかる（図1）。

道路にせり出して品物を並べる市場のような密度の高い空間は、かつての流路に沿ってカーブを描きながら続く。しばらくゆくと広場に出るが、ここにはかつて湊川の流路であった周辺の歴史を伝える案内板が立っている（図2）。右手の旧流路に沿って進むとすぐに現在の湊川に合流する。このあたりはしょっちゅう氾濫が起きていたことから田が荒れたといい、その名も「荒田（あらた）」という地名が残る。東側のエリアでは、かつて土手の擁壁だったと思われる石垣の上に住宅が建ち並ぶ不思議な景観の家並みを見ることができる（図3）。

ちなみに1901（明治34）年にできた新流路は、西に進んで「湊川隧道（すいどう）」と呼ばれる日本初の河川トンネルをくぐる。2000年にはこれに代わって新湊川トンネルが竣工したが、湊川隧道は近代土木遺産として保存されることになった。湊川を上流へ昇ると、かつて清盛が居を構えたという「雪見御所」や、平安時代から温泉地であったとも伝えられる「湊山温泉」が残るのどかな山間地の風景が広がっていく。

図2：東山商店街周辺の地理がわかりやすく示される案内板

図3：まるで城壁のようなボリューム感。道を挟んだ高低差に驚く

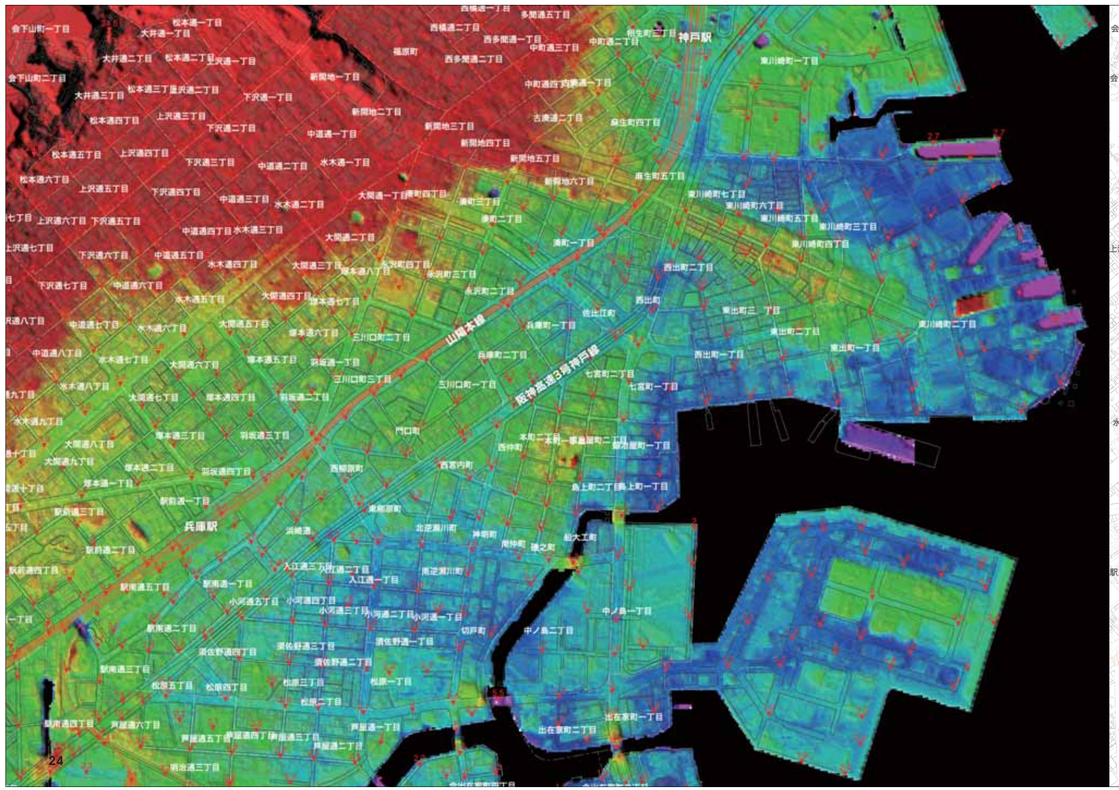
図1：湊川商店街から東山商店街へ向かう道。急勾配を上ることになる

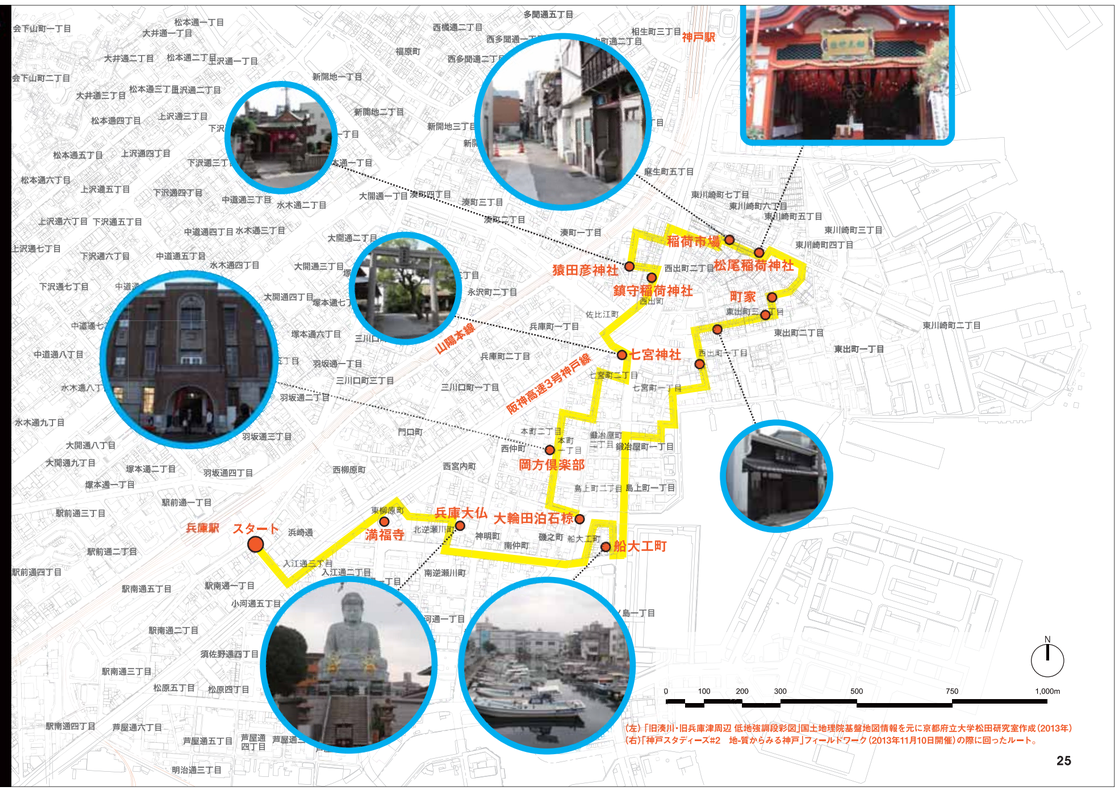
2

地-質からみる神戸

松田　法子
Noriko Matsuda

主要対象エリア　神戸市内：神戸港、旧兵庫津





(左)「旧湊川・旧兵庫津周辺 低地強調段彩図」(国土地理院基盤地図情報を元に京都府立大学松田研究室作成(2013年)
(右)「神戸スタディーズ#2　地・質からみる神戸」フィールドワーク(2013年11月10日開催)の際に回ったルート。

01 船大工町

（兵庫県神戸市兵庫区船大工町）

水に囲まれた小さな町

図1：個人所有の小型船がずらりと並ぶ

図2：せまい地割、道幅は近世からの連続を感じさせる

図3：かつて賑やかだった頃の生け簀を忍ばせる

S=1:2,500
地図：「1:2,500 地形図 兵庫」国土地理院、2000年発行

名前のとおり、船大工が住んだ町だったとされる。兵庫津全体では延享（1744-48）頃に183人、天明8年（1788）には280軒の船大工がいた。

船大工町は近世兵庫の町割を詳しく描く、元禄9年（1696）「摂津国八部郡福原庄兵庫津絵図」（P39）にも確認できる。絵図によると同町は「築島船入江」の入口にあり、湊に最も近い町のひとつだったことがわかる。町の北部には「船番所」もあった。かつての入江の一部は、おおよそ今の新川運河に重なるようだ。船大工町は町の二面をこの運河に接している（図1）。

水によって他の街区と隔てられた船大工町に入っていくのは、ちょっと小島に渡るみたいだ。町の中の地割は細かく、道も細い（図2）。他の街区とはまったく異なる高い密度は、この町に古い空間構成が残存していることを想像させ、観察にも力が入る。水は船大工町に流れる時間までも、まわりから少し切り離してきたのかもしれない。

運河の曲がり角あたりに、魚がゆらり泳ぐ生け簀があった（図3）。白長靴姿で作業中の青年に尋ねると、鮮魚の卸しをしているという。江戸時代の兵庫には有名な生け簀があり、『摂津名所図会』（1796-98年）にも描かれている（図4）。その生け簀はここからしばらく南へ下ったところにあったらしいが、船大工町の町歩きはふいに時間を超えて、かつての兵庫につながっていく。

図4：『摂津名所図会』
巻八「兵庫生洲」（所蔵：神戸市立中央図書館）

02 西出町

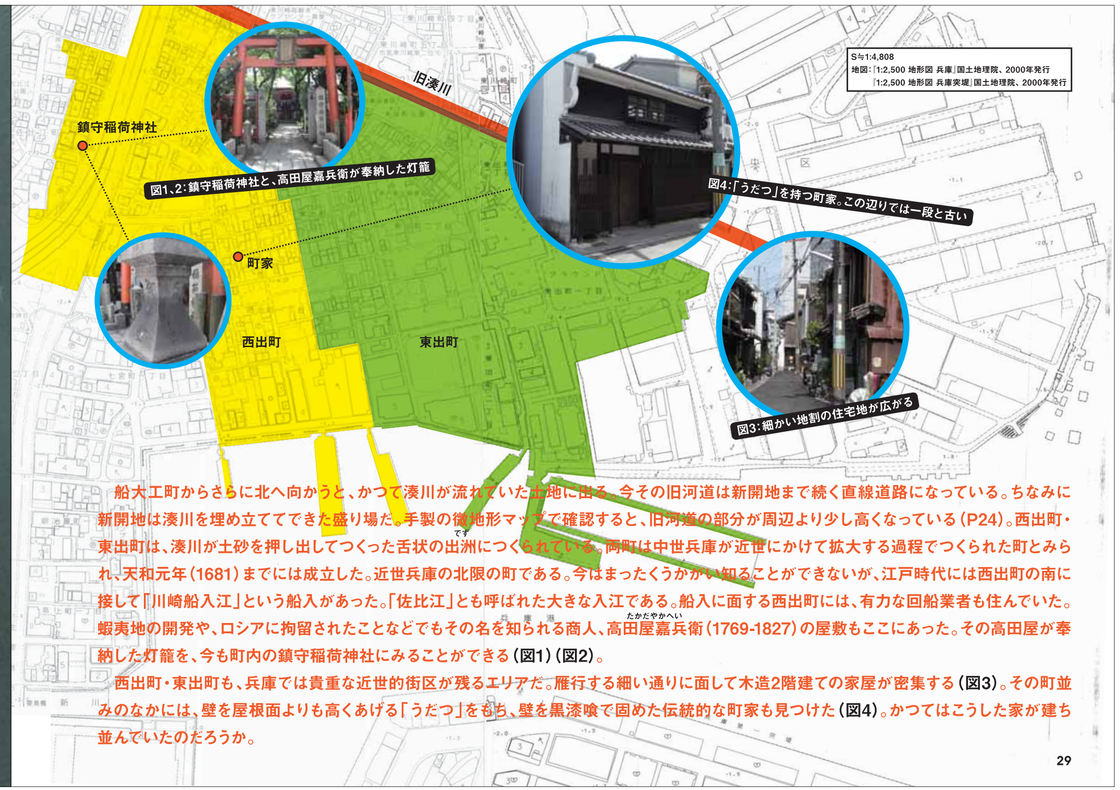
（兵庫県神戸市兵庫区西出町）

東出町

（兵庫県神戸市兵庫区東出町）

川が作った舌状の土地

写真：国土地理院（1995年撮影）



船大工町からさらに北へ向かうと、かつて湊川が流れていた土地に出る。今その旧河道は新開地まで続く直線道路になっている。ちなみに新開地は湊川を埋め立ててできた盛り場だ。手製の復元地形マップで確認すると、旧河道の部分が周辺より少し高くなっている（P24）。西出町・東出町は、湊川が土砂を押し出してつくった舌状の出洲（です）につくられている。両町は中世兵庫が近世にかけて拡大する過程でつくられた町とみられ、天和元年（1681）までには成立した。近世兵庫の北限の町である。今はまったくうかがい知ることができないが、江戸時代には西出町の南に接して「川崎船入江」という船入があった。「佐比江」とも呼ばれた大きな入江である。船入に面する西出町には、有力な回船業者も住んでいた。蝦夷地の開発や、ロシアに拘留されたことなどでもその名を知られる商人、高田屋嘉兵衛（たかだやかへい）（1769-1827）の屋敷もここにあった。その高田屋が奉納した灯籠を、今も町内の鎮守稲荷神社にみることができる（図1）（図2）。

西出町・東出町も、兵庫では貴重な近世的街区が残るエリアだ。雁行する細い通りに面して木造2階建ての家屋が密集する（図3）。その町並みのなかには、壁を屋根面よりも高くあげる「うだつ」をもち、壁を黒漆喰で固めた伝統的な町家も見つけた（図4）。かつてはこうした家が建ち並んでいたのだろうか。

03 佐比江

（兵庫県神戸市兵庫区佐比江町）

七宮神社

（兵庫県神戸市兵庫区七宮町2丁目3-21）

失われた入江

「摂津名所図会」巻八「佐比江」（所蔵：神戸市立中央図書館）

図2：境内の入口に立つ灯籠

図1：遊女たちに親しまれていた猿田彦神社

図3：七宮神社の拝殿

江戸時代から開発が進み、次第に埋め立てられていった「佐比江」は今、「佐比江町」という地名にわずかに名残を留めている。佐比江町には猿田彦神社という小さな社があり、境内の入口に立つ花崗岩製の灯籠には文政5年（1822）の年記がある（図1）（図2）。近世、佐比江の一部を埋め立ててできた佐比江新地には、多くの茶屋・遊女屋が営業していた（摂津名所図会）。

猿田彦神社から南へ向かうと、ほどなく阪神高速神戸線が立体交差する大きな五差路に出る。界隈でも特に交通量が多いこの場所に、港町兵庫の産土神（うぶすながみ）といわれる七宮神社が鎮座する（図3）。神社が伝える由緒によると、一説に同社は平清盛の福原遷都に伴って港を整備する際に祀られたという。

元禄9年の兵庫津絵図（P39）をみると、七宮神社の南には順に北宮内町・宮内町・宮前町などが続いているが、今それらの町々はなく、道も街区も大きく変わってしまった。七宮神社の境内もかつてより小さく、社殿も新しい。

兵庫津のある兵庫区は、昭和20年の空襲で壊滅的なダメージを受け、さらに阪神・淡路大震災でも甚大な被害を受けた。兵庫の町に歴史的な痕跡を探すのに注意深い観察が必要な背景には、兵庫の町が経験してきた苦難の歴史がある。しかしこの地には、大輪田泊、福原京、中世・近世の兵庫津、近代兵庫と、連綿たる都市の営みが紡がれてきた。同地を襲った様々な危機からの脱却は、都市の復興と更新の歴史でもある。

地－質からみる神戸

松田　法子

ここで言う「地−質」とは、一般的な「地質」の意味合いを含みながらもそれだけではなく、都市や建築のありようやその行方をより深く考えていくための言葉として提起した。その場所やその土地のキャラクター、あるいはクオリティのようなものを再確認すること、また、普段わたしたちの目に見えている都市や建築のいわば表層部分だけではなく、空間的・時間的にその深層を掘り下げていくこと。それらの作業が、私たちの居住が展開する場所のことをより色々な方向から考えていくための、ひとつのステップにはならないだろうかと考えている。

今回は、「神戸」という場所を複合的に捉えていくため、試みに「大地」、「海」、そして双方のあわいである「水際」という大きな3つのエリアを設定する。そして、旧居留地・元町・三宮に代表される「神戸」と、これに隣り合う兵庫とを具体的なフィールドに選び、「地−質からみる神戸」というテーマで考えてみたい。

1　大地からみる神戸：地形と〔地〕域

東西に延びる六甲山脈から短距離で海へ落ち込む細い帯状の陸地、神戸。その帯を南北方向に分節する川や岬。地形条件から多様に領域付けられる集住体の空間を、ここでは「地域」（ちいき）ではなく〔地〕域（じ・いき）と呼んでみたい。古代から近代までの時間軸も掛け合わせて、大地の側から神戸の空間について考える。

まず、現代神戸の市街地地図から、川・岬など主な地形・地理的要素を確認していくと、和田岬や湊岬など〔地〕域を形づくる大きな自然地形がみえてくる。さらに視線を引いて巨視的に眺めると、神戸の市街地北側には1000m級の山嶺、六甲山脈がおよそ40kmにわたって連なっている。海岸近くに長く高峰が続くこうした地形は、日本列島全体でみてもそう多くない。ところで神戸の町の側からは一枚の屏風のようにも見えるこの六甲山脈は、上空からみるといくつかの山塊から構成されていることがよくわかる（図1 大阪湾周辺段彩図）。

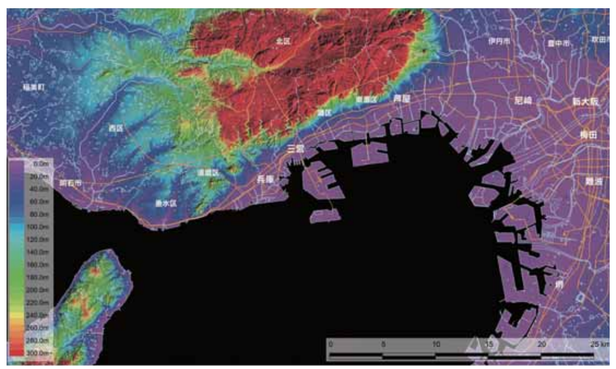


図1 大阪湾周辺段彩図

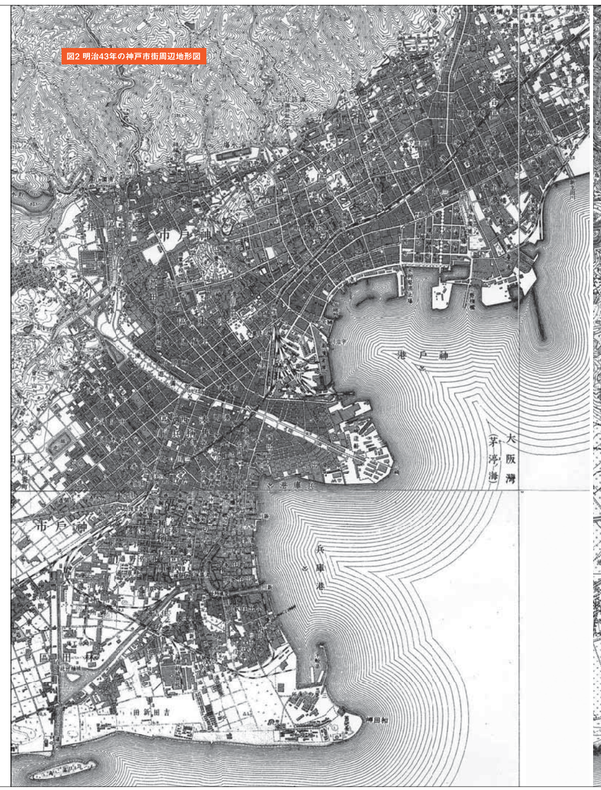


図2 明治43年の神戸市街周辺地形図

図3 明治18年の神戸市街周辺地形図

六甲山脈の西半分は複数の山脈に分岐していて、北から丹生山塊、鈴蘭台の低山地、西六甲である。南に向かう西六甲の尾根は、神戸を抜けると一端海中へもぐる。それが海の上へ再び顔を出したものが淡路島北部の陸地である。

続いては、海と低地の側から神戸をみてみよう。地質学分野において大阪湾は「大阪湾盆地」と呼ばれている。その底は神戸寄りを沈降の中心として南に傾き続けているそうで、泉州沖の水深が浅く、神戸沖の水深が深いのはこの地質構造のあらわれだという。こうした地学的現象は港の水深に直結していて、2章で触れるとおり、神戸・兵庫・大阪など大阪湾に面する各都市の性格の違いにも直接つながってくる。

さて、以上のような自然地形の一方で、神戸界隈には埋立地など人工的な地形の改変も多く、現在の地図で神戸を見てもどこが元の海岸線なのかが、ただちにはわかりにくい。そこで次に、神戸が位置する大地の形と町の原形・原景を、現代から近代にさかのぼりながら確認していこう。

明治43年に発行された陸軍陸地測量部の兵庫・神戸の実測地図によれば、旧生田川～湊川間では海抜100m付近の山裾まで建物が地面を埋めている（**図2 明治43年の神戸市街周辺地形図**）。ただ、和田岬や湊岬など岬の突端や、兵庫・神戸両市街地の東西はまだ白く抜けており、集落や田畑が広がる。続いて明治18年にさかのぼると、兵庫と神戸の市街地はどちらもまだ山裾には達さずに、臨海の低地を中心に展開している。海岸線にも自然地形が残されている。ここにみえるコウモリのような海岸線が兵庫-神戸の原地形だったことを、ここではひとまず確認しておこう。山裾までの斜面段丘上には村々が点在し、地形と集落の立地には、性格上、より対応的な関係がありそうだ（**図3 明治18年の神戸市街周辺地形図**）。

さらに近世にまでさかのぼって、集落の立地と地形の関係を確認してみよう。1800年代初頭に作製された「伊能忠敬古図 神戸」によると、地図では現在の神戸市街地界隈に、兵庫・神戸村・二ッ茶屋村・走水村・北野村などの集落の名が書き込まれている。これら各集落の立地を明治18年の実測図とあわせて確認していくと、海沿い・街道沿い（平野）・段丘上（山裾）という大きく3つの帯状ゾーンに分けることができそうだ。明治期以降、外国人の住宅が多く建てられ、今も「風見鶏の館」や「うろこの家」など数々の洋館が残る山手の北野は、山裾の段丘ゾーンに位置する近世以来の村、北野村がその前身であり、また、元町・栄町・海岸通など鉄道各線の海側に広がる現代神戸の中心市街地は、神戸村・二ッ茶屋村・走水村といった海沿いの村々をルーツとしている。なお、現在大丸神戸店や神戸市立博物館、旧居留地十五番館などがある外国人

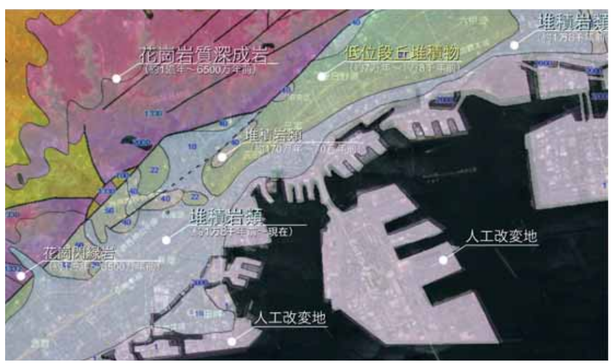


図4 神戸市街地の地質・地形オーバーレイ図

居留地は、神戸村の範囲のうち田畑などが広がっていた集落東側の土地に開かれたものである。

最後に、文字通りの「地質」から神戸をみてみよう。現代・明治43・同18年の各地図と地質図とを重ね合わせ、地形と地質との関係、神戸一帯を特徴付ける花崗岩の分布などについて確認してみた。神戸市街地の地質は中山手通あたりで切り替わっており、そのあたりから山手側は花崗岩質深成岩、海手側は堆積岩類もしくは低位段丘である（**図4 神戸市街地の地質-地形オーバーレイ図**）。明治18年の地図でみると、市街地はおおよそ低位段丘堆積物面で止まっており、花崗岩質部分には達していない。花崗岩質部分の地形はおおむね傾斜のきつい段丘であり、その地表には溜池をもつ農業集落が立地している。近世のところで確認した、段丘上の村々のゾーンにも重なるエリアである。

神戸は全国的にみても特異な地形、つまり、長く連なる高峰を背後にして海までの距離がとても短い帯状の地帯に、市街地が細長く伸びてできた都市である。その原形がどのようなものであったのか、以上ここでは〔地〕域という概念を使いながら、地形・原地形・地質と集落の立地関係を含めて探ってみた。大地の側、〔地〕域から地域をみると、私たちの居住とその物理的な基盤との関係を、より深いところから大掴みにしてはゆけないだろうかと思うのだ。

2　海からみる神戸：泊・津・湊・港

列島各地や海外に接続する袋状の海、瀬戸内海。近代港湾都市神戸、中近世港町兵庫（兵庫津）を中心に、大阪湾に面するミナトの歴史を辿りながら「港町」神戸の深層にアプローチしてみたい。

『万葉集』にみえる神戸・阪神間の地名や風景のうち、もっとも頻繁に登場するのは浦・泊・浜・海・崎・松原など、ミナトや海に関するもので、その数は全体の3分の1に及ぶという。また、地形環境分析によれば、当時このあたりには東西方に延びる帯状の砂堆（砂洲・浜堤）が何層かできており、その隙間や背後に潟状の低湿地が深く入り込む場所がいくつもあって、そこが船舶の停泊地になっていたと考えられている。

古代から中世に港湾もしくは港町を指す言葉には、「津」「湊」「泊」がある。地形と呼び名との対応関係をみると、「津」とは沿海部の湾・入江に、「湊」は河口に対応し、「泊」はその立地地形にかかわらず停泊し宿る港湾を指すという。さらに「津」には湾の奥と、比較的フラットな砂浜の海岸に横長に形成されるものとがあって、この類型でいえば兵庫津は後者のタイプの津、ということになる。

他のミナトとのつながりや関係から神戸界隈の歴史を探っていくうえではまたとない史料がある。それは『兵庫北関入船納帳』で、兵庫津に出入りしていた船や貨物について文安2年（1445）の1年分を記録した台帳である。中世港町の具体像を伝える文書としては世界的にも類例のない貴重な史料であり、これまでこの帳簿を元に様々な研究がなされてきた。そこに記録されているのは、船籍地、積荷の種類と積載量、関銭と納入日、船頭の名、問丸の名の5項目であり、ここからは例えば、兵庫津に入港した船の船籍で最多のものは地元・兵庫津の船で1年に296回、次いで牛窓133回、由良（淡路島）116回、尼崎94回、室（網干の西）80回、網干63回、尾道61回などということが知られる。

従来、中世には日本列島を網羅するような長い航海のルートは成立していなかったと考えられていた。しかし最近の研究では、地方ごとに形成された航海圏同士が複合的に結びつき、全体で日本列島を網羅するような海のネットワークが形成されていたことが明らかにされつつある。兵庫はそのネットワークに位置付く、列島でも主要な港のひとつだった。

近世になると、列島におけるミナトマチの地勢は大きく変化する。西廻り・東廻り航路の確立により、近世前期以降、日本海・太平洋岸には新たな港町が誕生した。近世港町はその成り立ちや性格から、①中世港町を継承・拡大したもの、②城下町の外港として建設されたもの、③災害などによって港町を移転・再興したもの、に分けることが可能とされ、兵庫はうち①のタイプにあたる。

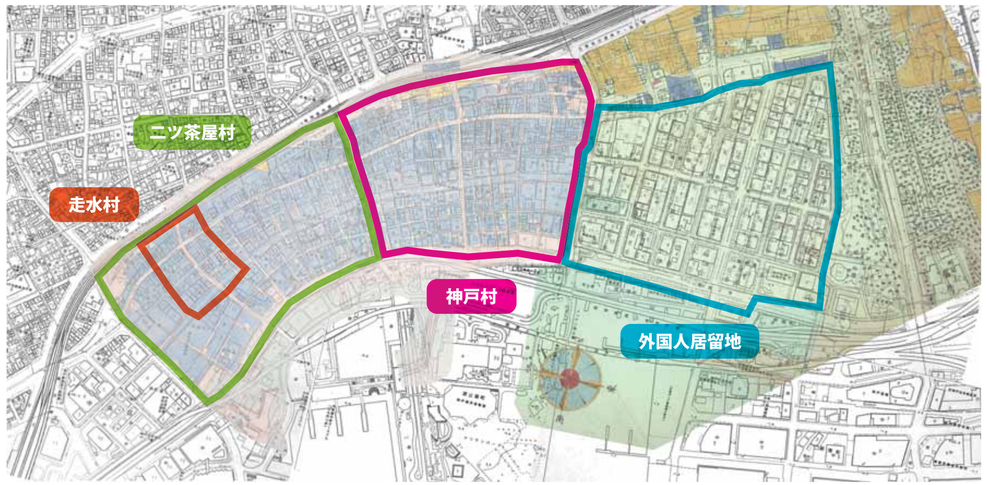


図5 近世3ヶ村の位置比定図

長崎出島のオランダ商館付医師、ケンペル（1651-1716）の江戸参府旅行日記から、元禄時代の兵庫津の様子をみてみよう。「大坂の港は浅く、われわれの乗ってきた船では行けないので、前もって荷物を積み込んでおいた四艘の小舟を（注、兵庫津で乗り換えて）漕いでいった」。水深が浅くて大型船が入港できない大坂にかわって、兵庫は西廻り航路などの物資を積み替えて大坂へ輸送する港として繁昌していたのである。

こうしてみてくると、中世・近世の神戸界隈では、「兵庫」という地名・町の名が、地域の重要な核として浮かび上がってくる。現在その場所はJR兵庫駅の南側、海の方へと下っていった界隈にあたる。「神戸」を訪れても、「兵庫」に足を伸ばしたり、またその歴史を知る人はあまり多くないだろう。しかし現代神戸の市街地において、古代の福原京や大輪田泊（おおわだのとまり）以来、中世・近世へと連綿たる都市性を有してきた場所はまぎれもなく兵庫だった。だが開港後の明治12年1月、維新後数度目の行政区画変更によって「兵庫」「兵庫津」の名は消え、兵庫は神戸区に編入された。以降、昭和6年に「神戸市兵庫区」として再び現れるまで、行政的に「兵庫」の名は地域から失われさえする。しかし、開港都市「神戸」に対するミナトマチとしての先行性からも、また、現在の神戸市域において最も古くから営まれてきた都市の所在地としても、兵庫のことをもっとよく知る必要があるのではないか。

ついでにもうひとつ、大事なのではないかと思うことを言っておこう。それは開港以前の「神戸」イメージの乏しさの打開についてである。文献などでは“開港以前の神戸は寒村に過ぎなかった”などと表現されることが多く、その具体像はあまり注目されていない。確かに開港以前の「神戸」界隈、つまり狭義にはのちに外国人居留地が建設されることになる神戸村や、またその隣村である二ッ茶屋村などについては史料も少なく、その実像を探るには困難がともなう。しかしだからといって、これらの村々が“寒村”でしかなかったことにはならないだろう。現段階ではわずかな手がかりに限られるが、それについてここで若干の検討をしておこう。なお、神戸村の市街地はおおよそ現代神戸の元町・栄町・海岸通の各1〜3丁目に、二ッ茶屋村は同4〜6丁目にあたる（**図5 近世3ヶ村の位置比定図**）。

まず、近世の「神戸」界隈で兵庫津だけが港町だったのかといえばそうではない。神戸村と二ッ茶屋村も、実は多くの廻船を所有していた。しかも近世初頭には既に大型廻船を所有する船持層が存在したことがわかっている。天和・貞享・天明年間の各浦における船数を比べてみれば、天和・貞享頃（1681〜88）の廻船数は兵庫津23、神戸村37、二ッ茶屋村114、上荷船は兵庫のみで297、渡海船は兵庫津38、神戸村17、二ッ茶屋村28、漁船は兵庫のみで476などである。兵庫津は船数が多いが、その大半は上荷船という小型の輸送船か漁船だったのであり、群を抜いて廻船が多かったのは二ッ茶屋村であったことなどがわかってくる。例えば、上方（かみがた）から出羽国の港町・酒田に来港した船の記録では、高砂・大坂・塩飽牛島などの廻船に混じって、とくに二ッ茶屋からの廻船が多かったという記録もある。神戸村でも兵庫津以上の数の廻船を保有していた。先にも述べたとおり兵庫の主な機能は積み替え港であったから、小型の船が中心だったわけだ。また兵庫では漁船数にもみるとおり漁業が盛んだったが、二ッ茶屋・神戸村では少なくとも19世紀前半にはほとんど漁業を行っていないらしく、両村は廻船業に特化した海村としてかなり都市的な性格をもつ村であったと考えられよう。二ッ茶屋村は名酒の産地・灘と共に、酒造業が盛んな村々からなる「灘五郷」の一村でもあった。

こうしてみると、決して兵庫津だけに集中するのではない、近世神戸界隈のミナトマチ性が明らかになってくるとともに、開港都市「神戸」の主な前身集落である神戸村や二ッ茶屋村の生き生きとした実像が浮かび上がってはこないだろうか。幕末の絵図からは、神戸・二ッ茶屋・走水村の3村が細かなグリッド状の街区をもつ集落であったことも確認できる。多くの道が輻輳（ふくそう）する空間構成は、むしろ町場的であったといえる。しかも検討の結果、格子状に走るこれらの道の多くは、近代「神戸」の街路へと継承されていることがわかってきた。そうすると開港都市「神戸」以前の神戸は、“寒村に過ぎない”どころか、開港場の都市空間の基盤をなす社会と空間ではなかったのだろうか。

明治元年11月には神戸・二ッ茶屋・走水の3村が合併して「神戸町」となり、それぞれに特徴をもっていた各村固有の様相はみえづらくなる。その一方で、3村はひとつの都市「神戸」へと編成されていき、私たちが親しむ町「神戸」が、次第にその姿を現してくるのである。その基軸となったのが、「元町通」となる西国街道と、これに並行して走る「栄町通」の新設、それから旧3村の浜をつなぐように通された「海岸通」であった。開港都市神戸は、既存の村の空間構成を引き継ぎながらも、陸上の動線による結びつきを強化しながらつくりあげられていった。

3　水際からみる神戸：氾濫原・埋立地 都市の低地性

海辺の低地に造営された二つのグリッド都市、福原京（平安時代）と旧居留地（明治時代）。税関や倉庫など近代神戸の都市インフラは前進する埋立地の先端に位置し、また私たちは現代神戸のアイコンを公園化された埋立地の上にみる。平地と水辺は都市を吸い寄せる二大要素だ。それは都市が本質的に洪水や津波など水の危機を内包し、かつ脆弱な地盤面の上にあることも示している。

ここでは、兵庫津ほか港町内部の空間構成にも降り立ってみたい。そしてそのなかでは、先に挙げたような都市の本質的な所在地のことや、今回「水際」と呼んでいる空間との親和性などにも注目しよう。県庁所在都市など、多くの主要現代都市の母体になっているのは近世城下町である。近世には河口のデルタ地帯に展開した城下町が少なくない（江戸、大坂、名古屋、広島ほか）。加えてここで、自生的な都市や“都市的な場”がどこに生まれてきたかについても、中世にさかのぼって確認しておこう。中世都市の代表的な遺構としてよく知られるのが、現在の広島県福山市にあった「草戸千軒（くさとせんげん）」である。芦田川の中州かその周辺低地の砂洲のようなところにあったと推測されているが、寛文13年（1673）におこった芦田川の氾濫で川底に埋もれた。海浜の砂洲や中州のようなところに形成された中世都市にはほかに、博多や堺、尼崎など多くの例がある。

こうした場所の地形は元来きわめて変わりやすく、洪水などで地面が失われることもあるし、また逆に水が運んできた砂礫の堆積によって新たな地面が生まれ出ることもある。例えば、信濃川・阿賀野川という大河の河口に位置する近世港町、新潟・沼垂（ぬったり）の変遷はその顕著なもので、2つの都市は絶えず変化する地面にあわせてその立地や町の形を変えてきた。

神戸の町も実は度々水害に見舞われてきた。被害が大きかったものに、例えば昭和13年7月の阪神大水害があり、神戸市・阪神地区で死者616名、倒壊・流失家屋3623戸などの被害を出している。この時には三宮交差点など町の中心部が猛烈な濁流に襲われた（**図6 三宮交差点そごう前の激流**）。水の制御は開港後早々から神戸の重要な課題でもあり、早くも明治4年には居留地に隣接する位置を流れていた生田川が付け替えられ（現フラワーロード）、また兵庫側では明治34年に湊川が付け替えられている。湊川は元々暴れ川で幾度となく氾濫し、福原京建設以降もその流路はかなり変化してきた。近代以降は明治29年に大水害をもたらしており、これが前述した付け替えのきっかけになった。

図6 三宮交差点そごう前の激流

それでもしかし水際に維持され続ける都市の様子を、ここでは、湊川の南に隣接し、海や入江など複数の水面に接する水際の低地に営まれてきた港町・兵庫津（ひょうごつ）の空間構成と共に確認していこう。元禄9年（1696）「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」は、兵庫津を描く現存絵図として最古のもので、同絵図をトレースした（**図7 元禄期の兵庫津**）を使いながら確認していく。なおこの絵図は発掘調査と描写内容との一致が確認されるなど、その測量・描出精度はかなり高いとされる。図中の網掛け部分は、『兵庫北関入舩納帳』から確認がなされた、中世にさかのぼる町々である。その兵庫津の町割を、今回作成した微地形マップ（P24／旧湊川・旧兵庫津周辺 低地強調段彩図）と並べてみよう。この地図は海抜0～5mのエリアを50cm刻みで色を変えて示してある。水際の低地と都市の原初的な範囲との重なり合い、また、普段はなかなか気がつかない低地の微細な地形を確認するためだ。さて、図7では範囲外だが、微地形マップの右上の方、周辺より比高が少し高くなっている湊川の旧河道が、舌状の岬・湊岬を形成しているのがわかるだろうか。その湊岬の南半分に位置する西出町（ひがしでまち）・東出町（ひがしでまち）は、湊川が土砂を押し出してつくった出州（でず）の上に成立した町である。元禄の絵図では幅が狭く細長い街区だが、明和6年（1769）の別の絵図では町の範囲が州の全体に広がっており、18世紀中頃にかけて急速に拡大したことが知られる。寛政8年（1796）の書上によると、東出町は家数559、人数2169で、兵庫津最大の町になっていた。中世以前の地形を復原した検討によると、両町が位置する湊岬は、中世時点ではまだ影も形もなかったと推定されている。それは湊川の流路変化に関係がある。大輪田泊時代、湊川は現和田岬のやや北、兵庫運河のやや南あたりに河口があったと考えられている。その後、川筋は北へ移動し、川が運ぶ土砂によって次第に湊岬が形成されたというのだ。近世後期には兵庫津随一の町となる西出・東出町はまさに、水と、水が生み出す新しい地面と共にある「水際」の町であったともいえる。

図7 元禄期の兵庫津

今この地を訪れると湊川の跡は天井川状で、周辺よりもやや高くなっている。両町は川から周辺へ向かって次第に低くなる微地形に沿って湾曲した街区を形成しており、町の西南は窪地になっている。今はその姿をみることができないが、かつてそこは水面で、「佐比江（さびえ）」という入江であった（**図7参照**）。佐比江跡のやや北にあたる現山陽本線北側で行われた発掘調査などの結果から、このあたりは弥生時代以降長い間、砂堆の後背湿地だったとみられている。

近世兵庫の町は、大きく3つの社会=空間からなっていた。それは、北浜組・南浜組という2つの「浦方」と、「岡方」である。簡単にいえば「浦方」は海、「岡方」は陸とそれぞれ結びつく集団であり、北浜組は図7中央の船入（築島寺南の入江）を境に、これより北側、南方組は同南側の海沿いを集団の空間的な範囲とし、岡方はこれら両浜組の西側、西国街道という陸の大きなインフラの周辺に位置する町々からなっていた。兵庫の町政はこれら岡方・浜方をあわせた「三方（みかた）」、すなわち海と陸の社会集団によって運営されていた。

中世以降拡大した兵庫津では、近世前期までに湊川沿いの西出・東出町が成立する。両町が拠点とする佐比江は、北前船の拠点だったという。しかも佐比江には、北前船など近世に発達した長距離航路そのものを支える技術を生み出した人物がいた。その名を工楽松右衛門（1743-1812）という。松右衛門は「松右衛門帆」と呼ばれる丈夫な帆の開発で知られる。北前航路は、この頑丈な松右衛門帆によって強化されたのである。

松右衛門は、漁師の子として兵庫津よりやや東にある川湊・高砂に生まれ、宝暦8年（1758）頃、15歳くらいの時に兵庫へ出て佐比江の船主のもとで船乗りになったという。その後1790年には択捉開発の幕命を帯びて蝦夷地に渡り、函館にドック、択捉島に埠頭を建設するなど、同地の開発と交易を行った。

さらにその松右衛門からつながる面白い人物が西出町にいる。それは高田屋嘉兵衛（1769-1827）で、蝦夷地の漁場開発や北前船交易などで成功した有力商人である。工楽松右衛門は引退する際に、自分が開発した地所を高田屋嘉兵衛に譲ったともいう。嘉兵衛は淡路島洲本近郊の出身で、18歳頃に兵庫へやって来たとされる。水主や船頭を経て廻船業者となり、蝦夷地経営に乗り出した。本店は箱館（函館）においていて、大火後の函館再建に尽力するなど、町にも多大な貢献をした。現在函館には高田屋の資料館もある。佐比江、西出・東出町のある北浜組にはさらに、近世から明治初期まで兵庫を代表する有力商人としてその名を馳せた北風家もいた。北風家は、工楽松右衛門を援助していたともいう。

フィールドワークでは、今日の神戸に先立つ都市であった兵庫津に注目し、水際の微地形マップを片手に、かつての町の痕跡と人々の営みを探しながら歩いた。

陸と海とのあわいである「水際」は、地と水という異なる空間を切り結ぶ。都市や都市的な場は多くそうした場所に誕生してきたのだ。

〔図版出典一覧〕

図1　国土地理院基盤地図情報を元に松田研究室作成、2013年
図2　大日本帝国参謀本部陸軍部測量局 正式二万分一地形図「神戸」「兵庫」（明治43年測量）ほかを合成
図3　大日本帝国陸地測量部 二万分一仮製地形図「神戸」「兵庫」「須磨村」（明治18年測量）を合成
図4　産総研地質調査総合センター提供「地質図Navi」Ver.1.0.2, 1/20万地質図及び図1を元に松田研究室作成、2013年
図5　現代の地形図・明治5年「兵庫神戸実測三千分箇之縮図」（神戸市立博物館所蔵）のオーバーレイ図、松田研究室作成、2013年
図6　神戸新聞社所蔵
図7　武藤直「中世の兵庫津と瀬戸内海水運」（林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』、中央公論美術出版、1981年）所収図を転載

〔主要参考文献〕

日本地質学会編『日本地方地質誌5　近畿地方』、朝倉書店、2009年
『新修神戸市史 歴史編1 自然・考古』、神戸市、1989年
辻川敦・大国正美編著『神戸～尼崎 海辺の歴史 古代から近現代まで』、神戸新聞総合出版センター、2012年
日下雅義『平野は語る』、大巧社、1998年
神木哲男・崎山昌廣編著『歴史海道のターミナル 兵庫の津の物語』、神戸新聞総合出版センター、1996年
市村高男「中世日本の港町」・宮本雅明「日本型港町の成立と交易」、歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』、青木書店、2006年
林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』、中央公論美術出版、1981年
ケンペル『江戸参府旅行日記』、斎藤信訳、東洋文庫、1977年
大手前大学史学研究所編『兵庫津の総合的研究　兵庫津研究の最新成果』大手前大学史学研究所、2008年
「特集・兵庫津から神戸へ」、神戸史学会編集・発行『歴史と神戸』第21巻第3号、1982年
「特集・中世兵庫津の新しい歴史像」、神戸史学会編集・発行『歴史と神戸』第39巻第2号、2000年
「特集・変わる近世近代都市・兵庫の歴史像」、神戸史学会編集・発行『歴史と神戸』第39巻第3号、2000年
「特集　近世都市・兵庫津」、神戸史学会編集・発行『歴史と神戸』第46巻第2号、2007年
『新修神戸市史 歴史編2 古代・中世』、神戸市、2010年
『新修神戸市史 歴史編3 近世』、神戸市、1992年
『神戸市史 資料1』、神戸市、1971年
松下正司編『日本の美術4　草戸千軒町遺跡』、至文堂、1984年
ほか

3

兵庫県の沿岸地域の空間性

主要対象エリア　兵庫県沿岸部、淡路島

山田　創平
Sohei Yamada

太平洋
日本海
日本一低い中央分水界

01 氷上回廊

（兵庫県加古川市・高砂市 加古川河口～京都府舞鶴市・宮津市 由良川河口）

山越えのない水分れ街道

由良川と加古川は共に「水分（みわか）れ」と呼ばれる本州一低い分水界を源とする河川である。ここを源として由良川は日本海側に、加古川は瀬戸内海に流れてゆく（図1）。当地には「水分れ公園」と「水分れ資料館」があり、展示や地形の観察などを通して、日本海と瀬戸内を直接つなぐ水の路としての氷上（ひかみ）回廊を知ることができる（図2）。

筆者はかつて由良川河口から由良川を北上して水分れへと至り、そこから加古川を南にたどって瀬戸内へ出たことがある。出発地点の由良川河口から日本海を見ると、美しい孤島が目に入る。日本海側の海洋民が神聖視する冠島（雄島）である。その姿は宗像大社沖津宮（福岡県宗像市）の、海の正倉院と言われる沖ノ島と重なる。どちらも周囲は約4キロであり、どちらも観光客などの出入りは厳しく制限され、女人禁制であり、島の神は海神であり女神である。

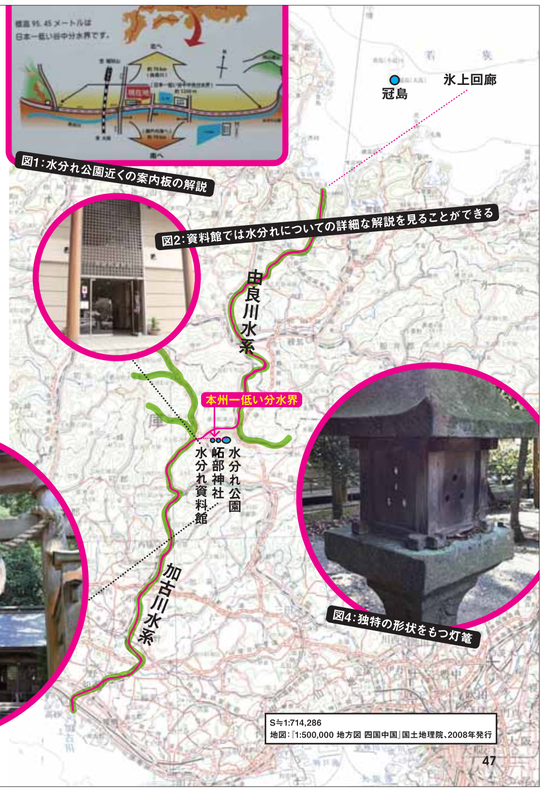
水分れに至ると、そこは内陸であるが、当地の「岐部（いそべ）神社」の鳥居は日本海側や瀬戸内の沿岸部でよく観察される両部鳥居（柱に補助が付く）の特徴を備えている（図3）。また灯篭は独特の形状をしているが、これは七星ではないだろうか（図4）。加古川の河口に出たとき沖合に孤島が見えた。由良川から冠島をみたのと同じ光景であった。それはまさに写し鏡のような不思議な一致であった。

図1：水分れ公園近くの案内板の解説

図2：資料館では水分れについての詳細な解説を見ることができる

図3：神奈備山（神様の山）である剣開山の前に建てられた

図4：独特の形状をもつ灯籠



02 淡路島

（兵庫県淡路市・洲本市・南あわじ市）

古代淡路島の空間性

淡路島は北端で明石海峡を挟んで中国地方に近接し、東端で紀淡水道を挟んで紀伊半島に近接し、西端で鳴門海峡を挟んで四国地方に近接している。また南には太平洋が開け、東には大阪湾が、西には播磨灘・瀬戸内海が開け、そこに流れ込む加古川ー由良川（氷上回廊）を遡ることで、北は日本海へと開けている。その意味で淡路島は陸地と陸地を橋渡す島であり、同時に、朝鮮半島や沿海州、東南アジアやオセアニア、ユーラシア大陸をはじめとした様々な地域へと至る諸海に接している。

淡路島のこのような地理的特性は、当地に原始から4世紀にいたる海洋文化の隆盛をもたらしただけでなく、5世紀には大陸的な陸上騎馬王権と海洋文化との対立の前線としての役割を与えた。五斗長垣（ごっさかいと）内遺跡（兵庫県淡路市黒谷）は、そのような時代に営まれた巨大な鍛造製鉄遺跡である（図1）。鍛造製鉄は海洋民の文化である。この遺跡は高台にあり、そこに立つとはるか下方に海を見渡すことができる。そして反対を振り返ると、「ころがし」の場所であり、入谷仙助が「天への通い道」と言った山頂信仰の場所、西浦の常隆寺へと至る道が目に入る（図2）。天に昇った死者の魂はまた、同時に海の底、常世（とこよ）に存在している。ここでは海底と天上とが同一に見られる。五斗長垣内遺跡に立つと、古代人の感覚が蘇るかのように、淡路島の空間の立体性を感じることができる。

03 七宮神社

（兵庫県神戸市兵庫区七宮町2丁目3-21）

海と海の神々に抱かれた町

図1

図2

地図：「神戸」、平凡社「日本大地図帳九訂版」、2006年発行

私は昨年の秋に、七宮神社（しちのみやじんじゃ）を訪れた。七宮神社は神戸市兵庫区七宮町にあり、生田裔神（えいしん）八社のひとつとされる。そもそも神戸とは生田神社の神戸（かんべ）（神社の付属民）を意味する言葉だが、この生田神社をとりまくように8つの神社があるといい、真偽は定かでないが、この並びが北斗七星を思わせるとの説がある。

七宮神社を訪れたとき、その8社の主祭神が書かれていた（図1）。一宮、三宮、四宮の三神はいわゆる宗像三女神であり、海の神である。他にも出雲や熊野といった海洋文化の拠点と関わりの深い神々や、海の神である天津彦根命（あまつひこねのみこと）が名を連ねる。当社の灯篭は新しいながらも日月であり伝統が受け継がれている（図2）。

後の論説でも述べるが海洋民にとって月や星は洋上航海において目印となる重要が存在である。日月の灯篭と、夜通し星に祈る民間信仰の庚申講（こうしんこう）との関係はすでに諸研究が明らかにするところだが、ねぶた、天満天神信仰もまた庚申講と同様に天体に対する信仰である。それは道教の影響を受けつつ同時に海洋文化の名残が色濃く残る文物でもある。雷が船に乗って駆け降りるという神話があるが、天神なる天の雷の神が船に乗って渡御する大阪天神祭にその姿を垣間見ることができる。天神は後世、清涼殿への落雷を契機に菅原道真の怨霊と習合された。道真と船渡御は何の関係もないが、天神が元来海洋神であることを考えると、舟が大量に動員される天神祭の姿も合点がゆく。それは福岡県沖ノ島のみあれ祭と同型であろう。日月の灯篭は神戸の近傍で他にもたくさん見ることができる。神戸が海と海の神々に抱かれた町であることをよく表している。

兵庫県沿岸地域の空間性

～大阪湾と播磨灘の水の文化を中心に～

山田　創平

1　日本列島弧と海洋文化

「地図」は読んで字のごとく「地」の「図」であり、そこには陸地に関しての情報がまとめられている。川や湖、海といった陸地以外の部分は、多くの場合青一色に塗りつぶされており、名称以外の情報は皆無である。「地図」は私たちの生活空間を視覚的に把握するための優れた図像だが、そこで把握されるイメージは陸地中心という意味において一面的である。もとよりそのような空間観は、土地を基盤とした生産や収奪、上納や納税のシステムである封建制の成立や、版図獲得競争と呼ばれた帝国主義、植民地主義の要請によるものであったろう。しかしポスト近代、ポスト植民地主義の時代にあって、そのような空間観や世界観は修正を迫られている。それは資本や蓄積の世界観ー陸地中心の世界観ーから、分配や流動の世界観ー水の世界観ーへと視野を遷移せよとの文化的要請である。晩年の柳田國男や折口信夫、谷川健一や網野善彦といったオルタナティブな歴史研究、民俗学には明らかにその種の思想が通底している。それはつまり、日本列島弧の水の文化を掘り下げることは、近代批判を意味するということだ。「水の文化」を掘り下げることは実はそれほど難しくない。研究の蓄積もあるし、日本列島弧は黒潮に洗われる島々の連なりであり、そもそも海や川、湖沼や湿地といった水と深く関わる地域でもある。水に関する様々な文化研究を横断的に確認しながら、「神戸」の場所性を再検討するのが本稿の目的である。

2　「国土創世」神話はもとも海洋神話である

古事記・日本書紀の最初には伊弉諾と伊弉冉による「国生み神話」があらわれる。記紀によれば、伊弉諾と伊弉冉は兄と妹の関係にあるが、儀礼を通じてタブーを乗り越え子供を産み、その子供が日本列島の島々となる。荻原千鶴は「原初の洪水で生き残った兄妹が結婚して始祖となる、東南アジアなどの洪水神話との類似も指摘されており」(1) としており、また三浦佑之は国生み神話について「洪水によって始原以前にいた者たちがすべて死に絶え、兄と妹だけが生き残ったというかたちでタブーを乗り越えようとする」(2) としている。佐佐木隆は、洪水神話は「中国南部から東南アジアにかけての諸民族に多く分布するだけでなく、沖縄八重山にも類似の話のあることが報告されている」とし、同種の神話が黒潮流域に偏在していると指摘している (3)。溝口睦子は「イザナキ・イザナミ系の神々は、みな海と深くつながっている。」(4)　とし、いわゆる諾冉神話が元々は「多神教的」「海洋的」「母系的」特徴を持つ地方神話であったとする。

ここでいう洪水とは津波のことであろう。柳田國男は「宮古の方では年代は伝えぬが、海沿いの栄えた村が一朝にして覆没した物語を幾箇所ともなく伝えている。多分は記録に遺らぬ何度かの津波があって、よく似た惨害を繰返したのであろう」(5) としており、琉球弧に津波の伝承が多く伝わると指摘している。また赤嶺政信は多良間島の津波伝承を以下のように紹介している。

大昔、プナゼーという兄妹がいた。ある日、畑に出て仕事をしていると、南の方から突然、大きな波が押し寄せてきた。二人は慌ててウイネーツヅという丘に駆け登り、シュガリガギナ（力芝）にしがみついて難を逃れた。助かったのは、兄妹二人だけだったので、二人は夫婦の契りを結んだ。最初に生まれたのはボウ（蛇）とパカギサ（とかげ）で、次にアズカリ（シャコ貝）とプー（麻苧）が生まれた。三番目に人間が生まれた。プナゼー兄妹を祀る祠がある。(6)

日本列島弧はその誕生の神話からして極めて海洋的であり、南洋的である。津波は海霊が引き起こすとされたが、海霊は様々な海産物をもたらす。海産物は海霊の恵みであるからすべての人々に平等に分配される。海洋文化の特質は分配であり、それは前述のように陸の文化ー資本や蓄積ーに対するオルタナティブである。そして古事記がそのような文化圏の最初の地として挙げる具体的地名が「淡路之穂之狭別島」であり、現在の淡路島が比定される。三浦は「国生み神話の舞台は、淡路島を中心とした大阪湾から瀬戸内海であり、そのあたりを本拠とする海人系の人々によって伝承されていたのではないか」(7) としている。淡路島は日本列島弧の海洋文化においてまさにその起点に位置している島なのである。その淡路島と兵庫県との間にある内海が播磨灘である。

3　播磨灘と海洋民

播磨について山中襄太は以下のように記している。

はりま【播磨】兵庫県の西南大半を占める国名。古事記には針間と書く。俗説に「張浜」ともいう（吉田東伍地名辞書）（中略）坪井九馬三氏はいうーハリマはアリマ（有馬）と同じく、インドシナのチャム語のharum（香気、香気ある）だと。三島敦雄氏はいうーハリはセミティック・バビロニアのHari（神託を宣言する神官の名）、マは助辞。古代に加古川の地に日神、火神を祭って、神政を行ったから起こった地名だと。(8)

「播磨」の地名の起こりについてはその学説が一定せず、特に後段の諸説についての評価は定まっていない。古事記にあらわれる「針間」と吉田の「張浜」の関係は検討に値すると思われる。現在の「播磨」が古事記では「針間（はりま）」であり、それが「張浜（はりはま・はりのはま）」であったとすると、宮城県石巻市で奥海と呼ばれた万石浦針浜が思い起こされる。

当地には海幸山幸の伝承がある。海幸山幸神話は隼人(はやと)征討の神話化であり南九州が舞台とされるが、そもそもこの類型の神話は比較神話学によって「インドネシア方面が起源」とされている。松本直樹はその上で「王権の神話として、皇祖ホヲリ(ホホデミ)が異界を訪れ、新たな力を獲得して本国へ帰還、また阿曇の祖先(海神)の貢献によって隼人(はやと)の祖先を制圧し、その未来永劫につづく服属の約束を取り付け、国の王として君臨するという意味を持つ」(9)としている。つまり非海民である王権がいち早く服属した海民である阿曇の力を借りながら最後まで抵抗していた海民である隼人を配下に収めた過程を、南洋由来の神話型を借りながら表現したものであるということだ。言い換えればこれは海の民の陸の民への従属の物語であるということになる。

かつて「播磨」が「針間」とされ、「針間」が「張浜」であり、東北の「針浜」に同様の海民の服属神話があるとすると、「針間」の「針」は海幸山幸の釣り針の意である可能性も検討しうるかもしれない。またそうであるならば播磨灘は南九州と同様に海の民から陸の民への覇権の移り変わりが起こった場所であったろうということになる。

私は播磨灘での覇権の遷移の時期が隼人の征討よりも早かったと考えている。神話研究では海洋民から騎馬民への覇権の移り変わりは、国生み神話をはじめとした海洋神話から北方ユーラシア(主に高句麗)の影響が強い「一神教的」で「父権的」な神、タカミムスヒの神話への変遷として記述される。このことは日本列島弧における、海洋文化から陸上文化へのヘゲモニーの変遷を象徴しているという。その変遷の時期は5世紀とされる。白石太一郎は「それまでまったくみられなかった馬具が副葬されるようになり」としており、一般的には王墓級とされる墳墓が奈良盆地から大阪平野に移動する時期、いわゆる河内王権成立の時期とされる。

河内王権と淡路島とのつながりに関して武田信一は洲本市下加茂のコヤダニ古墳から出土した三角縁神獣鏡を例示し、淡路が4世紀の末には中央勢力に従属していたとした上で次のように指摘している。

古代淡路は海人族の住む島で、『日本書紀』には「淡路の海人」「淡路の御原の海人」「淡路の野島の海人」の名が見える。かれらは魚介や海藻をとり塩を焼き、朝廷へ貢納するとともに、天皇の命令で船をあやつり韓国までもでかけている。南淡町阿万は、おそらく御原の海人の住みついた地であろう。(10)

淡路島に展開していた海洋民は河内王権期に矢口足尼(やぐちのすくね)を国造として王権に掌握されるが、武田は淡路島に有力な国造を埋葬するに足る墳墓が存在しない点に着目している。谷川健一は「海人系の葬制の習慣は土をもって墳墓を築くことへの抵抗があったのであろう」とし、さらに「昭和三十六年一月、鳴門市に属する大麻町板東の古墳から凝灰岩の家形石棺が出てきた。」「それを開けると中からきれいに洗った骨が出てきた。そうして洗骨の上には頭蓋骨がのせてあり、また延喜通宝が十三枚その棺内に入れてあった。」(11)とした上で、淡路島に卓越した墳墓が存在しないのは、洗骨葬に代表される南洋的、海洋的文化の名残が強固であったためとしている 。淡路島は海の文化が陸の文化に接収される前線であり、その舞台は播磨灘を挟んで現在の兵庫県にも及ぶだろう。日本書紀は次のように記述している。

はじめて播磨に至ったとき、天皇が、淡路嶋に行幸されて遊猟しておられた。天皇が、西の方をご覧になったら数十の大きな鹿が、海に浮かんでやって来た。そして播磨の鹿子水門(かこのみなと:現在の兵庫県加古川の河口の地)に入った。天皇は、側近の人に語られて、「あれは、どういう大鹿なのか。大海に浮かんでたくさん来たが」と仰せられた。そこで側近の人もともに不思議に思って、ただちに使者を遣わして視察させた。使者が行って見ると、それはみな人間であった。ただ角をつけた鹿の皮を衣服としていたのである。(12)

鹿と海洋民の関係についてはいまだ判然としない。志賀島(しかのしま)や牡鹿半島(おしか)、加古川(古くは鹿子川)といった海洋文化の卓越した場所に鹿の音や表記が残り、さらに五来重(ごらいしげる)がもともとは「海辺の廻り」であったとする巡礼者、後の修験道者が法螺貝を持ち、鹿皮を腰巻(引敷(ひっしき))とすることなどに鹿と海洋文化の関係が確認されるが、その理由については定説がない。ただ確実に言えることは山のものが海にあるという視座の遷移、空間の逆転、垂直の空間性である。

4　垂直の空間性

垂直の空間性という言い方は当を得ていないかもしれない。なぜならば海洋民の空間性は垂直というよりも、むしろ上が下になり、下が上になるような無重力状態にちかいものであるからだ。後藤明は興味深い逸話を紹介している。

2007年にミクロネシア・カロリン諸島・プルワット島の航海士マニー・シカウさんを沖縄に招いて海洋博公園まで車で行ったときのことである。カーナビをじっと見入った彼は「これは私たちのカヌーに乗っているときのイメージと同じだ!」と叫んだ。「私たちはカヌーを中心において、周りの島が動いていくと考えるからだ」と。そして「島が動くとその背後に見える星もちがってくる。それで私たちはどれだけ進んだのか把握するのだ」と。

陸上の空間性は平面を移動してゆくから、移動する主体は「私」である。だが洋上では「私」は動かず、周囲の空間が移動してゆくのだ。後藤は「彼らが移動しているというのはわれわれの錯覚なのではないか」と言う。「私」は動かず、海と空が「私」の周りを移動してゆく。いわば球体の中に「私」がいるような空間である。そして海と空の境目はしばしば見えなくなりもする。土佐日記の有名な歌「雲もみな波とぞ見ゆる海人(あま)もがないづれか海と問ひて知るべく」が思い起こされる。

そして海にも空にも光る物がある。空においてそれは月や星といった天体があり、海においては光を反射する生き物、発光する生き物であり、海底火山や落雷であるという。「星の航海術」と呼ばれる南太平洋の伝統的航海術では、風向きや海流、生物相といった多くの環境情報と共に天体の観測が重要な役割を

果たすという。生物相であるところの海中の生き物や天体は、海洋民にとって洋上航海の重要な手がかりであり、その形象は海洋文化それ自体を象徴すると言ってもよいだろう。例えば海洋文化の名残が残る場所を訪れると日月の形象を持つ灯篭がある。灯篭とはまさにそれ自体光を放つものであり灯台である。海と空は一体となり、そこには光がきらめいている。

海と空の境目がわからないという状況。それは陸と海の間でも起こる。谷川健一は「海亀や鮫などを自分の先祖とみなす人たちがいた」(13)としている。また天鳥船(あめのとりふね)をひくまでもなく、神話では天を行く船は鳥に例えられる。谷口雅博は「鳥も船も死者の霊魂を運ぶものである」とし、また「雷は船に乗って天翔(あまかけ)り降臨する」(14)としている。船が空をゆくイメージである。

また常世(海底の死者の世界)は水葬や、地先(じさき)の島や洞窟への埋葬から生じた思想であるとも言われる(15)。死者の魂は船に乗り死者の世界へと赴く。死者の世界は天上であり、同時に海底である。そこに区別はない。その境目には汀がある。汀を挟んでこの世とあの世が存在している。それは常識的なデカルト平面では理解しがたい空間観であり、谷川は「この世とあの世は全く相似の事象を反映する合わせ鏡である」(16)と語る。

そして淡路島ではその思想が具体的な葬送の儀礼として残っている。海底にいる死者に食料を届けるため、握り飯を天に投げ上げるという儀礼である。

「ころがし」は、結果として重力の法則に従って転がっていくために生じた表現で、もともとは、天へ投げあげて、昇天する死者の食糧にしたものであるにちがいあるまい。団子がもとの形状であり、のちに団子では粗末と思うようになり、やがて、握り飯に格上げされたものと考えられる。(17)

垂直の空間性は、大きな視点でも確認することができる。それが由良川加古川ライン、いわゆる「氷上回廊」である。由良川は水分(みわか)れと呼ばれる分水嶺を通じて加古川とつながっている。そこに水運の連続性を見出す考え方である。舞鶴市史は播磨灘と若狭湾との文化的つながりを次のように指摘している。

丹後の山陰系土器は前期新段階に属していることなどを理由に、丹後の最も古い弥生文化も瀬戸内系に属するものと考えられ、このルートに「加古川―由良川の道」が想定されている。(18)

水の文化はここに至って実際に山嶺を超えるという立体性を示す。考古学では「青龍三年銘の鏡をもつ高槻市安満宮山古墳の問題を含め、丹後と摂津の深いつながりが推定できる」(19)とされ、日本海側と瀬戸内とのつながりが検討されはじめている。

私は淡路島を含む兵庫県沿岸地域は、空間の垂直性という海洋文化の原初的な世界観がいまでも残る場所としてとらえている。京都府の舞鶴市で多くの人から聞いた印象深い話がある。それは舞鶴の人たちにとって、京都は遠い場所、大阪・神戸は近い場所という話である。舞鶴は京都府であり、直線距離では京都の方がはるかに近いにも関わらず、である。由良川加古川ラインの空間性、若狭湾、舞鶴湾から瀬戸内へと通じる水の空間は今でも人々の意識の中に

息づいているのではないか。そして今回は検討しないが、おそらくその空間理解には若狭湾と琵琶湖、瀬田川・淀川と大阪平野も含まれる。地図を見ると、それらの地域は確かに水によってつながっている。

神戸をはじめとした兵庫県沿岸地域について考えるとき、水の文化やその系譜をたどることで、これまでとは異なった地域の立体性が見えてくる。その空間観は、近代的な空間理解をはるかに超えて深淵である。そしてそのような深みを垣間見る文物は、私たちの足元に今も無数に残されている。

註

1 大林太良、吉田敦彦『日本神話辞典』(荻原千鶴「国生み神話」の項)大和書房、1997年、132頁
2 三浦佑之『口語訳古事記』文芸春秋、2002年、19頁
3 大林太良、吉田敦彦『日本神話辞典』(佐佐木隆「洪水神話」の項)大和書房、1997年、144頁
4 溝口睦子『アマテラスの誕生―古代王権の誕生』岩波書店(岩波文庫)、2009年、108頁
5 柳田国男『島々の話その四(1924)』(柳田国男全集)ちくま文庫、1989年、639頁
6 赤嶺政信『沖縄における津波と「油雨」に関する伝承」、『沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究』琉球大学、2008年、03頁
7 三浦佑之『口語訳古事記』文芸春秋、2002年、20頁
8 山中襄太『地名語源辞典』校倉書房、1968年、293頁
9 大林太良、吉田敦彦『日本神話辞典』(松本直樹「国生み神話」の項)大和書房、1997年、72頁
10 武田信一『淡路島の地名研究』神文書院、1996年、31頁
11 谷川健一「淡路の海人族」『常世論(谷川健一著作集)』三一書房、1988年、140頁
12 『日本書紀、巻第十、応神天皇十三年』井上光貞監訳、中央公論社、1987年、325頁
13 谷川健一「若狭の産屋」、『常世論(谷川健一著作集)』三一書房、1988年、59頁
14 大林太良、吉田敦彦『日本神話辞典』(「アメノトリフネ」の項)大和書房、1997年、32頁
15 谷川健一「序章」、『常世論(谷川健一著作集)』三一書房、1988年、など
16 谷川健一「序章」、『常世論(谷川健一著作集)』三一書房、1988年、12頁
17 入谷仙介「淡路島の伝承と民間信仰―神話と古代を尋ねて―(海と列島文化―瀬戸内の海人文化)」小学館、1991年、240頁
18 『舞鶴市史通史編・上巻』1993年
19 『青いガラスの煤き―丹後王国が見えてきた―大阪府立弥生文化博物館図録24』2002年、83頁

HOLDING INFORMATION
開催概要

神戸スタディーズ#1
神戸レイヤーマッピング
講師　深澤 晃平
2013/2/23(土)　11:30-17:30
レクチャー、まち歩き

神戸スタディーズ#2
地-質からみる神戸
講師　松田 法子
2013/6/26(水)　19:30-21:00
第1回　レクチャー　大地からみる神戸：地形と〔地〕域

7/10(水)　19:30-21:00
第2回　レクチャー　海からみる神戸：泊・津・湊・港

8/3(土)　13:30-15:00
第3回　レクチャー　水際からみる神戸：氾濫原・埋立地　都市の低地性

11/10 (日)　13:30-17:30
第4回　フィールドワーク

神戸スタディーズ#3
垂直の空間性からみる神戸
〜大阪湾と播磨灘の水の文化を中心に〜
講師　山田 創平
2014/1/12(日)　17:30-19:00
レクチャー

PROFILE
筆者紹介

深澤 晃平

編集者、地図デザイナー

1978年東京都生まれ。
編集者、地図デザイナー。

大学在学中より都市化された空間に地形や先史時代の遺跡・寺社仏閣などをレイヤー化して重ね合わせる地図を作成。その地図は中沢新一氏の著書『アースダイバー』に収録されているほか、自治体による観光ガイドマップや地域活性化webサイトの編集・制作などを手がける。最近の仕事に『東京の自然史』(貝塚爽平著)、『吉本隆明の語る親鸞』(吉本隆明著)、『東京人 2012年7月号』(特集・東京地形散歩の表紙及び地図)など。

松田 法子

都市史・建築史研究者
京都府立大学大学院
生命環境科学研究科 専任講師

1978年生まれ。
博士(学術)。

都市と自然の歴史的な切り結びなどに関心をもち、これまでは主として温泉ー都市を対象に、熱海や別府など近代日本の巨大温泉町の形成とその社会・空間構造について研究。同テーマによる学位論文にて日本観光研究学会 学会賞受賞(2009年)。著書に『絵はがきの別府』(左右社、2012年)。近年はオランダ・フリースラント州や新潟平野など、国内外の沿海低地部における都市・集落形成と水・低地との関係について調査研究を進めている。東京大学大学院客員研究員(工学系研究科建築学専攻)、日本学術振興会特別研究員、東京大学大学院学術専門職員などを経て、2012年より現職。

山田 創平

都市社会学者
京都精華大学専任講師

1974年群馬県生まれ。
名古屋大学大学院博士課程修了。文学博士。

専門は地域研究(芸術と地域、マイノリティと地域、都市空間論)。厚生労働省所管の研究機関や民間のシンクタンク勤務を経て現職。現在、NPO法人アートNPOリンク理事、大阪市現代芸術創造事業実行委員、京都市若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり事業実行委員、京都産業大学、京都造形芸術大学非常勤講師などを兼任している。著書に『ジェンダーと「自由」ー理論、リベラリズム、クイア』(共著、2013)、『ミルフイユ05ー技と術』(共著、2013)などがある。各地のアートプロジェクトで、リサーチやコンセプトデザインに関わる他、自らも作品を制作している。

芹沢 高志

デザイン・クリエイティブセンター神戸
センター長

1951年東京生まれ。
89年にP3 art and environmentを開設。

99年までは東長寺境内地下の講堂をベースに、その後は場所を特定せずに、さまざまなアート、環境関係のプロジェクトを展開している。2014年より東長寺対面のビルにプロジェクトスペースを新設。帯広競馬場で開かれたとかち国際現代アート展『デメーテル』の総合ディレクター(2002年)、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長(2003年〜)。横浜トリエンナーレ2005キュレーター。別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター(2009年、2012年)。また現在、P3 art and environment 統括ディレクター(ピースリーマネジメント有限会社代表取締役)。

神戸スタディーズ
時間と空間を横断しながら、足元を見つめる

発行　2014年3月
アートディレクション　上田英司（シルシ）
グラフィックデザイン　上田英司、大福理絵（シルシ）
編集　松本ひとみ
印刷　アート印刷株式会社

協力
高見佳男（P2-3 写真提供）
NPO法人淡路島アートセンター

制作・発行

KIITO

デザイン・クリエイティブセンター神戸
〒651-0082　神戸市中央区小野浜町1-4
Tel.078-325-2201
http://kiito.jp

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。
©2014 Design and Creative Center Kobe All rights reserved.